

石工

～豊臣秀吉の名護屋城築城を機に根付いた集団と技術～

石で造られた構造物は木や鉄のように腐食することはなく、ほとんどが製作当時のまま残される。代表的な例がエジプトのピラミッドだが、日本でも紀元前にドルメンという巨石を使った墓がつくられ、代表的な遺跡が唐津市の葉山尻遺跡である。

朝鮮半島を経て伝えられた石を扱う技術は大きな石室や石棺を持つ古墳を築造し、唐・新羅連合軍に備えた古代の山城をめぐるようになる。しかし、石を生活に活かす技術が進化することはなく、長年、日本人は木と紙の文化を続ける。

石が建築資材として重用されるようになるのは、堅固な城づくりを必要とした戦国時代からである。自然石の性質を知り、ノミと槌を用いて加工する技術を収めている専門職人たちを石工と言うが、唐津地方の石材加工の歴史に一大転換期をもたらしたのが、豊臣秀吉の朝鮮出兵である。名護屋城築城と各大名の陣屋造りに全国の石工たちが呼び集められた。

鍋島藩も、県内最高の技術水準を誇った牛津・砥川の石工集団を派遣、石垣造りなどで指導的な役割を果たす一方、全国の優れた技術を吸収した。

秀吉の野望がついえた後、砥川の集団が玄海町・値賀川内や鎮西町・石室などに土着し、唐津藩内でのさまざまな石材加工の中心的役割を果たしていく。石工の里として知られる値賀川内は藩内の実権を握り、砥川から同地に移り住んだ徳永九郎左衛門は、唐津城築城の石工棟梁として力を振るった。寺澤志摩守広高の松浦川大改修の際も石垣工事などに携わったと見られている。

鳥居、狛犬、五輪塔、石仏など宗教関連の石像物のほか、地元の農民とともに傾斜地に石垣を築き棚田をつくり、生産性の向上にも貢献した。相知町・蕨野の棚田は8.5㍍と日本一の高さを誇る見事な石積みである。玄海町・浜野浦や肥前町・大浦など上場には海と棚田の景観が素晴らしい場所が点在し、観光客のドライブコースにもなっている。

石橋で最近珍しい発見があった。石をアーチ状に組み上げる眼鏡橋は県内におよそ70基確認されているが、これまで相知町以北では未確認だった。2008年、浜玉町平原で小型ながらアーチ形の橋が確認された。地元石工が福岡に修業に行き帰ってから造ったと伝えられ、上場石工の系譜とは異なるユニークな石橋である。(写真①・②)

◎エピソード・伝承・うんちく など

※2008年に再発見の情報!

分野

産業

◎地図・写真・統計資料など



写真①

眼鏡橋

唐松地区では相知町より北で初めて確認された(浜玉平原)

(佐賀新聞情報コミュニティHPより)



写真②

「石橋(はねばし)」

岸から突き出すように埋めた石柱の上に、石柱を渡した珍しい(浜玉町平原)

(佐賀新聞情報コミュニティHPより)



蕨野の棚田の石垣

(あそぼーさがより)

◎引用・参考文献(出典)

- ◆『新版・鎮西町史』(下巻)
- ◆『玄海町史』(下巻)
- ◆県内研究者＝高瀬哲郎氏(元県立名護屋城博物館学芸課長)

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へお問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html